

要旨

一切衆生とは誰か —大般涅槃大経を起点として—

加納和雄

衆生とは誰かを問うことは、自分は何者かという問いに通じる。そして「一切衆生は〜である」という仏典の教説は、しばしば読者・聴衆への個人的な要請として我々の前に立ち現れ、当事者化された我々に行動の変容を求めてくる。そのような仏説はしかし後代に抽象的な思弁の地平に解体されると、「一切衆生」は制限付きの全称から無制限の全称への推移（当事者的存在から他者的存在への推移）を余儀なくされることもあった。

「一切衆生」という表現は初期仏典からみられ、殺生してはならない相手、慈愛を向けるべき相手、死すべきさだめの存在など様々な対象を指す。その場合の「一切衆生」とは、経典読者にとって、相手、自分、両者のいずれかを指すが、基本的には、例外なき全ての生き物を意味する。ところが仏典の中には「一切衆生」という表現が必ずしも万人を意味しない例がある。本発表では如来蔵思想において、如来蔵なる「一切衆生」が誰を指すのかをめぐって仮説的な見通しを立てたい。それは同思想の救済の範囲を問うことにつながる。

最初期の如来蔵系経典に『大般涅槃大経』と『如来蔵経』がある。前者では「一切衆生に如来蔵/仏性が存在する」等の表現が繰り返されるが、その文脈に注意すると「一切衆生」が例外なき万人を意味せず特定の人々を指すことがある。例えば「どんな衆生であっても如来蔵を会得すべくこの経典を信じる者たちは、自分自身が三帰依となる」、「如来はいまここにいる、と修習する者たちの家に如来は留まる」などの表現からは、「一切衆生」が同経の教えを信奉する人々に限定された「一切」であると知られる。また「界が存在するといっても、布施・持戒・智慧・法を有する人に存在するに過ぎないと説明すべき」とも述べる。つまり「一切衆生」とは同経が想定する経典読者・聴衆であり、当時実在した特定の人々を前提としたと考えられる（入信前の人々または優婆塞か。優婆塞への呼びかけも披見される）。一闡提という如来蔵なき例外的な存在も、上記の限定的な「一切」理解と齟齬しない。さらに同経末尾の、「一切」に例外ありと強調する一連の教説とも見事に符合する（後述「少分一切」参照）。

『如来蔵経』の第七喩では「一切衆生」が仏を宿すことを如来が見るというが、「畜生以上の一切衆生」として「一切」の範囲を限定する。この限定の含意は、修行を遂行しうる衆生のみが仏を宿すことであろう（動物の本生譚等参照）。事実、第八喩で同経の教えの目的は、修行に怯む者の心を鼓舞することという。この場合「一切衆生」は、修行前の仏教徒をターゲットにした限定的な言説として理解できる。

その後の如来蔵思想の経論群では如来蔵が次第に一元論的傾向を強め、「一切衆生」の「一

切」は無制限の全称としての意味を強めてゆく。『央掘魔羅經』は「如来蔵が存在するので人々は戒律を守り梵行を行う」と説き持戒の根拠とする。また「一切衆生界が一界である」故に諸仏は殺生も肉食もしないと説き、「界」を鍵語とした包括的な概念を展開し、『不増不減經』とも軌を一にする。

『勝鬘經』では一乗説がより強調され一元論が厳格化し、如来蔵は一切衆生の生死の根拠とされる。また輪廻を厭い涅槃を願う動機とされ、仏道実践の根拠ともされる。

翻って『宝性論』は一乗の語を使用せず、むしろ瑜伽行派の三乗各別を支持する(5.19偈等)。基本的に一切衆生には法身が遍満し、真如が通底し、種姓が存するとして「一切」に例外を設けないが、「一切衆生」を畜生以上に限定する『如来蔵經』の言説も継承し、先行する異質な要素が共在する様相を呈する。一方で従来如来蔵の実在性と実践促進機能は堅守される。

しかし『楞伽經』では如来蔵が無我の意味に解体され、外道摂受の方便説の位置に再措定され、菩薩闡提説ともあいまって、如来蔵なる「一切衆生」は無制限の全称の度合いを強める。

さらに如来蔵説は中観思想に取り込まれて以降、思弁の地平へと解体され空の思想に解消されてゆく。特にカマラシーラ作『中観光明』では一乗説の根拠として援用される如来蔵が「二無我を特質とする本性光明なる法界」と規定され(『仏性論』と一致)、その法界は「一切衆生」に例外なく行き渡るとする。「一切衆生」は他者化され、当初の如来蔵説の当事者性は後退し、我々に実践を要請する迫力は色あせる。

以上、如来蔵なる「一切衆生」は当初、特定の人々が意図されていたが次第に無制限の全称なる客観存在へと推移したといえよう。その推移は、我々に語り掛ける対話的(ダイアログ)な經典の表現形式から、事実を客観的に叙述する独白的(モノログ)な論書の表現形式への移行と軌を同じくする。そして「一切」の制限的用法と無制限的用法はそれぞれ、伝統的な「二種の一切」の「少分一切」と「全分一切」とに対応する(『婆沙論』『瑜伽論撰事分』『成実論』等参照)。

キーワード：一切衆生、如来蔵、二種の「一切」